第1回「東日本大震災とアート」

【話題提供】
瀬尾夏美
アーティスト。1988年、東京都生まれ。
土地の人びとの言葉と風景の記録を考えながら、絵や文章をつくっている。2011年、東日本大震災のボランティア活動を契機に、映像作家の小森はるかとの共同制作を開始。2012年から3年間、岩手県陸前高田市で暮らしながら、対話の場づくりや作品制作を行なう。2015年宮城県仙台市で、土地との協働を通した記録活動をする。NOOK（のおく）を立ち上げる。現在は東京で暮らしながら、都内の団地にワークショップスペースの開設準備中。http://komori-seo.main.jp/blog/

武谷大介
学際的アーティスト。トロントと日本を拠点に活動。
“私のアプローチの二重性は、アジアと北米で過ごした生活、批判的な社会問題や環境問題、日本の伝統とポップ、ルネッサンス／バロック絵画の手法やイデオロギーなど、異質で多様な文化的背景が並置され混ざり合った環境を反映している。私の作品は、絵画、パフォーマンスアート、彫刻、写真、インスタレーション、キュレーションの分野を融合させ、創造性、制作、コラボレーションといったプロセスを重視し、文脈や環境に対する理解へのアプローチを試みる”
https://daisuketakeya.com/

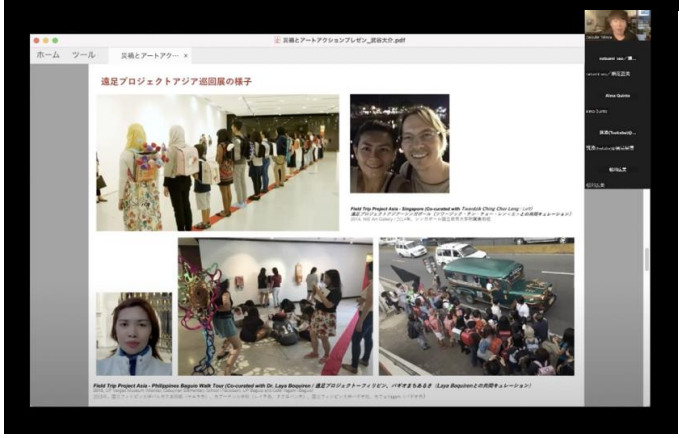
梶原千恵
日本学術振興会特別研究員(DC2)　女川町出身。遠足プロジェクト共同代表。九州大学でアートを通した記憶の継承について研究中。https://researchmap.jp/chiekajiwara

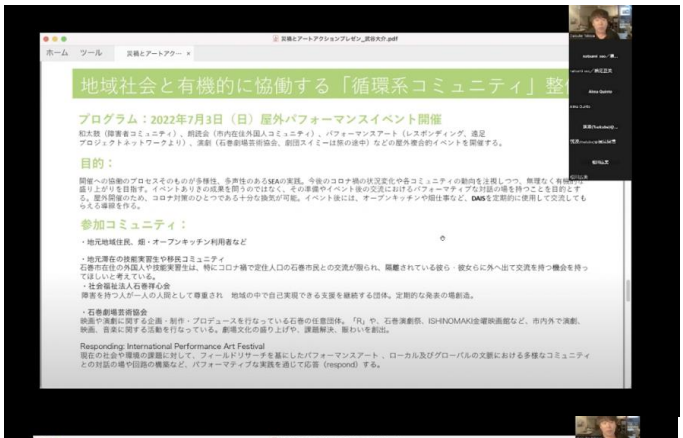
【コメント】
アルマ・キント（アーティスト）
嘉藤笑子（キュレイター、跡見学園女子大学）
山名淳（研究者、東京大学）

【遠足プロジェクト・遠足プロジェクトアジアのあゆみ＿武谷大介】
　遠足プロジェクトは2012年から宮城県の女川町で10年間続けてきたプロジェクトです。僕の立ち位置は代表というより「引率の先生」だと考えています。
このプロジェクトは、東日本大震災の被災地に大量に送られたランドセルが使用されずに廃棄処分になっていたことから、アート作品に形を変えることで、支援の気持ちを繋ぎたいと考えました。ランドセルアートは、作品として展示するだけでなく、参加者がそれを背負って町を歩くことで意味が見出されるプロジェクトなので、同じ作品を持って巡回しても、行く先々で違う反応を得られます。
　最初は女川町の仮設住宅でプロジェクトを始めました。そこでは4歳の子供からお年寄りなど多様な世代の人が交わる、井戸端会議のような場が出来ました。
　遠足プウロジェクトは国内では20カ所、その後、アジアは9カ国を巡回しました。また、カナダには津波で流れてきた瓦礫によって、海の貴重な生態系が崩れてしまうのではないかという危機感を持った科学者が多くいるため、海洋博物館とモントリオール州の美術館に巡回しました。
　アジアでは、シンガポールを皮切りに、台風被害のあったフィリピン、火山の噴火や津波被害のあったインドネシアに巡回しました。アジアでも場所によって反応が全く異なります。フィリピンの大学では、学生たちがゲームを作って自由に遊んだり、アーティストの作品を自分の言葉に置き換えて伝えてみたりしていました。
　最後の巡回先の台湾ではコロナ禍での開催となり、現地に行くことができませんでした。今後は巡回が難しいことから、プロジェクトが始まった女川や石巻に作品を戻し、現地の視点でもう一度活動プロジェクトを見直そうと考え、石巻にDAISという拠点を作りました。

　DAISは「Divesity Art Interaction Studio」の略で多様な人たちが集まって実験的なことを行える場を作る取り組みです。DAISの拠点があるのは、自然が生い茂っていて鹿などの動物がいるエリアと、人の住むエリアが交わっている場所です。現在は年に一回、石巻の市民演劇の劇団や技能実習生など、興味のある人が誰でも参加できる「ちょどフェス」を開催しています。
　遠足プロジェクトには180ものランドセルアートがあるので、それらを使った常設展示を作ること、そして、外から来るアーティストが滞在して地元の人と関わるレジデンスが出来たらと考えています。

遠足プロジェクトの特徴
余ってしまった支援物資のランドセル＞アート作品として形を変えて支援の気持ちを繋ぐ
たまり場を作る　こちらから出向く＝遠足
共に背負うことで共感　学びと成長、記憶の集積
自分の言葉で周りの身近な人たちに伝える
当事者として自分の入りやすいスタンスで関わる
震災の記録写真や映像とは異なり、子どもでも楽しいところから入れる
日本以外の国や地域の被災地、未災地でのローカルな課題とも共有できないか。
巡回先現地キュレイターとプロジェクトをローカル文脈に


遠足プロジェクトアジア巡回展の様子


地域社会と有機的に協働する「循環系コミュニティ」整
プログラム：2022年7月3日（日）屋外パフォーマンスイベント開催
和太鼓（障害者コミュニティ）、朗読会（市内在住外国人コミュニティ）、パフォーマンスアート（レスポンディング、遠足プロジェクトネットワークより）、演劇（石巻劇場芸術協会、劇団スイミーは旅の途中）などの屋外複合的イベントを開催する。
目的：
開催への協働のプロセスそのものが多様性、寛容性のあるSEAの実践。今後のコロナ禍の状況変化や各コミュニティの動向を注視しつつ、無理なく有機的盛り上がりを目指す。イベントありきの成果を問うのではなく、その準備やイベント後の交流におけるパフォーマティブな対話の場を持つことを目的とする。屋外開催のため、コロナ対策のひとつである十分な換気が可能。イベント後には、オープンキッチンや相仕事など、DASを定期的に使用して交流してもらえる雰囲気を作る。
参加コミュニティ：
・地元地域住民、畑・オープンキッチン利用者など
・地元滞在の技能実習生や移民コミュニティ
石巻市在住の外国人や技能実習生は、特にコロナ禍で定住人口の石巻市民との交流が限られ、隔離されている彼ら・彼女らに外へ出て交流を持つ機会を持ってはいと考えている。
・社会福祉法人石巻拝心会
障害を持つ人が一人の人間として尊重され　地域の中で自己実現できる支援を継続する団体。定期的な発表の場創造。
・石巻劇場芸術協会
映画や演劇に関する企画・制作・プロデュースを行なっている石巻の任意団体。「R」や、石巻演劇祭、ISHINOMAKI金曜映画館など、市内外で演劇、映画、音楽に関する活動を行なっている。劇場文化の盛り上げや、課題解決、賑わいを創出。
Responding: International Performance Art Festival
現在の社会や環境の課題に対して、フィールドリサーチを基にしたパフォーマンスアート 、ローカル及びグローバルの文脈における多様なコミュニティとの対話の場や回路の構築など、パフォーマティブな実践を通じて応答（respond）する。

2022年プログラム
遠足プロジェクトとアール・ブリュットの小展覧会
ローカルコミュニティと手作りした屋外イベント
畑作業
ちょどフェス動画

【記憶継承とアート＿瀬尾夏美】
◇自己紹介、これまでの活動について

　私は東京の出身で、美術大学を卒業した年に東日本大震災がありました。まず現地を訪れたいと思い、同級生だった映像作家の小森はるかさんと一緒にボランティアとして東北へ行き、そこから語りや風景の記録活動を始めます。2012年には岩手県陸前高田市に小森さんと移住し、作品や対話の場を作ってきました。2015年からは宮城県仙台市を拠点に、土地との協働を通した記録活動をするNOOKというコレクティブを立ち上げました。仙台市で7年間活動した後、現在はNOOKごと東京へ引っ越し、引き続き、災禍の記録をテーマに活動しています。

　基本的にわたしは、他者のことばを書く（≒記録する）ことをしています。他者のことばを書くために、語りの発生する場を作り、語りを記録し、描きなおす。日常の中ではなかなか発せられない小さな声を記録し、可視化することで、人や土地のさまざまな繋がりを作ることがアーティストとしての自分の仕事です。
　私のポジションは、何かが起きた“現地”と、遠く離れた場所を往復して繋いでいく「旅人」だと思っています。地域のコミュニティに完全に入り込むのではなく、少し距離を置きながらその土地にある語りを聞いて、別の場所を尋ね、声を手渡し、交換していきます。
　実践している具体的な方法は以下です。
　語りが出てくる場をつくること。話を聞いてその状況を記録すること。そこから物語を書くこと。さらにその物語から映像作品やテキスト、絵画などの記録物を作り、それらを用いて展覧会を行います。また、その場を使って対話をし、その対話自体を記録します。
　2014年に復興工事が盛んだった陸前高田で「波のした、土のうえ」という映像作品を作り、その映像と記録物で構成した同名の展覧会を全国10カ所で巡回し、災害を経験した場所を多く訪れました。たとえば、神戸で展覧会を開くと、観客から阪神淡路大震災の語りが出てくることがあります。
　私の役割は、東日本大震災のことを伝えることでもありますが、訪れた土地で起きた別の出来事と接続させることで、その土地自体の語りを聞くことだと思っています。

◇陸前高田について
　私はおもに陸前高田という街に関わってきました。はじめは、被災した街を見て怖いなと思っていたのですが、1年後に訪れた時には風景がきれいだなと感じて、絵に描きたいと思い、移住を決めました。何もわからない中で、とにかく街を歩いていると、花を手向けたり、祭壇を作ったりするような弔いの行為そのものが表現なんだと感じるようになりました。
　被災の後、人びとは壊れたまちの片付けをし、その後は、手を合わせに通ったり、思い出話を語らったりしていました。それはある意味で、豊かな時間だったとも言えます。しかし、そこへ復興工事がはじまるんですね。
陸前高田では、低い土地が津波で被害したので、土地を12m嵩上げすることになりました。この風景の変化に対する苦しみや不安を、「二度目の喪失」だという人もいました。
　この頃に初めて私たちは作品をつくる決意をし、「波のした、土のうえ」をつくりました。この作品の制作プロセスはこうです。被災した町の道筋が残っている間に、そ

の土地で生活してきた人と一緒に歩き、聞いた語りを詩のようなテキストにします。それを小森さんに託し、本人と話し合って書き直しをしたうえで、本人に朗読してもらいます。その声を軸にして、当時の陸前高田の映像を編集し、作品が出来ました。ここでは、実際に被災した人、いわゆる“当事者”と言われる人たちとの協働を通して作品を作りました。

　それから時間が経ち、2017年には嵩上げした土地の上にあたらしい街ができました。「震災を忘れてしまうことが怖い」「かつての街が見えなくなるのは不安だ」と語っていた人々も、実際に街ができると暮らしが忙しくなって、日常的な場では、震災の話が出づらくなりました。一方で、当時子供だった人たちが大人になって、時間が経った今こそ、震災の語りを聞きたいと話し始めました。
　その頃につくったのが、「二重のまち／交代地のうたを編む」です。震災当時子供だった4人の旅人を外から招き入れ、街の人の語りを聞気に入ってもらい、自分なりに語り直すワークショップを行いました。そして、その記録を構成し、映画やインスタレーション作品を作りました。被災地では語られなくなってきた震災の記憶を、旅人たちが聞き、彼らなりに語っていく。ちいさな継承の始まりを捉えようとした作品です。ここでは、実際に被災した人ではなく、“当事者”が弱い人たちとの協働を通して作品を作りました。

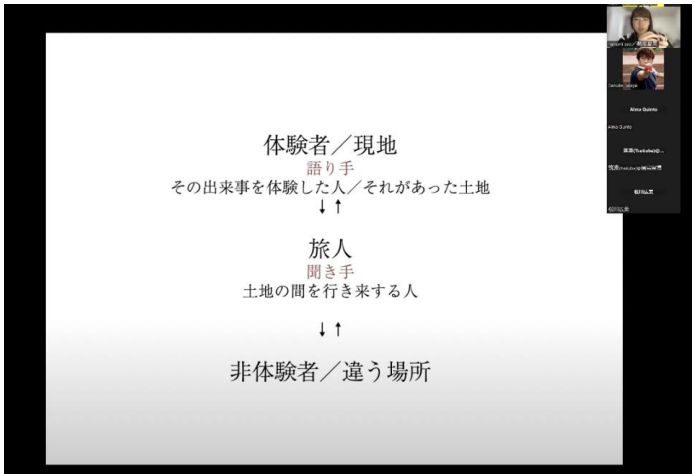
◇宮城県丸森町のこと
　2015年から宮城県丸森町の民話を聞きに通っていたのですが、2019年の台風で被災して、いくつかの集落が土で埋まってしまったんです。東日本大震災のような大きい災害が注目される影で、温暖化の影響もあり、小さな集落の被災が増えてきています。本来旅人であるはずの私は、東日本大震災だけを見ているのではなく、ここでも何かしなきゃと思いました。
　丸森町は宮城県の山間の集落ですが、福島県と隣接していて、放射能の被害がありました。そのために山の価値が下がってしまい、すこしでも役立てようという山主さんの思いもあって、ソーラーパネルによる山地開発が行われ、また、復興工事に伴う石の採掘も行われました。それらの山地開発が、土砂災害の原因の一つであるとも言われています。
　郷土史家や古老、被災した人たちなどさまざまな人に話を伺うなかで、災害を伝えるための物語が必要だと感じ、手始めに「台風に名前をつける」という対話のワークショップを行いました。また、そこで語られたことから、「やまのおおじゃくぬけ」という創作民話を書きました。今後、地元の民話の会の人たちや子どもたちと一緒に、人形劇を作るプロジェクトを行う予定です。

　これまでの活動のなかで、「継承」が必要である理由は以下に分けられると考えています。

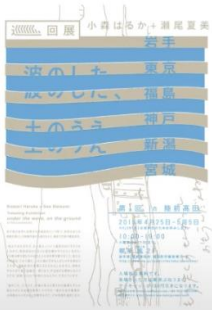
・防災
出来事の検証をし、防災・減災につなげること
・弔い
死者の存在を証明すること
・よりそい

継承と言うと未来の人に向けたものと思うかもしれませんが、同時代を生きる他者の悲しみやしんどさへの理解を促すことが個人的には大きいのではないかと考えています。
・コミュニティづくり
災禍によって現れた価値観や気づきを共有し、これからを考えること

◇カロク・リサイクルについて
　現在は、東京都江東区を中心に活動をしています。江東区は1923年に関東大震災、1945年に空襲被害を受け、何度も街を失う経験をしてきた場所です。そこを拠点にして、災禍の記録（＝禍録／カロク）を探し、読み深めながら、現在に応用するための表現を模索するプロジェクトです。



展覧会をする



巡回展『波のした、土のうえ』

第1回　2015.4.25-5.5　岩手県陸前高田市（喫茶　風）
第2回　2015.8.23-9.13　岩手県盛岡市（Cyg art gallery）
第3回　2016.1.9-1.31　兵庫県神戸市（KIITO）
第4回　2016.1.26-2.7　宮城県仙台市（Gallery TURNAROUND）
第5回　2016.2.20-3.6　福島県福島市（ギャラリー・オフグリッド）
第6回　2016.7.8-8.30　東京都千代田区（ギャラリー蔵）
第7回　2017.1.11-1.18　兵庫県尼崎市／水堂須佐男神社
第8回　2017.4.29-5.21　新潟県新潟市／砂丘館ギャラリー 蔵
第9回　2017.12.12-2018.2.4　広島県広島市／広島市現代美術館
第10回　2018.10.6-2018.12.2　秋田県秋田市／BIYONG POINT

波のした、土のうえ
-置き忘れた声を聞きにいく-

小森はるか＋瀬尾夏美

私の生まれた場所
草はら、土ぼこり、遠くに海が見える
見えなかったはずの青い海

アスファルトが剥がされて一面の砂地、所々に青い草が伸びている
あの角を曲がって少し歩いたその場所に
私はちいさな立て札を立てた

主人とふたりで営業していたちいさな小料理屋
ここが確かにその場所

——うちではお弁当の仕出しもやってたから、私はいろんなところに配達に行ったの
そこね、店の向かいの駐車場でお弁当を積んでね、配達に行くの
市役所、市民会館、図書館、みんなすっかり無くなってしまったけど

ご近所さんはほとんどみんな亡くなった
タバコ屋さん、クリーニング屋さん、定食屋さん
みんないなくなってしまった

何もない草はらの、でも確かなこの場所に立つと、ここにあった時間がふと鮮やかに思い出される
いろんなこと、昔のことも今のことも
この場所に入れなくなってから特にそう
忘れていたようなことをふっと思い出す

二重のまち／交代地のうたを編む

小森はるか＋瀬尾夏美

・話を聞く
・その状況を記録する
・物語を書く
・映像作品をつくる
・映像、テキスト、絵画などで構成した
　展覧会にする
・その場をつかって対話をする
・対話を記録する

山つなみ、雨間の語らい
宮城県丸森町のこと

カロク・リサイクル

・拠点づくり
　ワークショップスペース兼ギャラリー

・ネットワークづくり
　災禍の記録と表現を実践する全国のチームとつながる

・ワークショップ
　記録と表現に関わる技術をシェアする

・対話の場
　記録や表現をて話しあい、考える場

・発信
　レポートや展覧会で表現する

【勉強会の企画背景と研究＿梶原千恵】

現在、宮城県だけでも18ヶ所の災害伝承館がありますが、地域の人はあまり利用していない現状です。施設や語り部の存在の認知度はあるものの、利用したことがある人は２割にとどまり、県外の学校の利用の方が多い状況です。私は女川出身で地元の人間なので、災害伝承は地域の歴史文化と密接に繋がっているため、もっと市民に参加してほしいという思いがあります。

市民参加に関してアートに何ができるのか？ということが興味にあり、新たにつくる災害伝承施設では、市民参加をテーマにしたいと思っています。
また、個人的に防災とアートには距離があるように感じています。「災害伝承」は「こうあるべき」という前提が既にありますが、アートはその前提からは外れることが多い。参加の観点からすると、その前提があることによって参加できる人が少なくなってしまうと感じています。一方で、「わけない」ことや、文脈を広げることが重要だと考えていて、それはアートの得意とするところだと思います。なので、「作品を作るプロセスで地域の方と協働したり、対話をすることも表現である」ということを一般の人に伝えていくことも重要だと考えています。

私の立場は、媒介者／メディエーターだと思っています。バックグラウンドが美術教員や美術館の教育普及担当なので、アートの専門ではない方にアートの表現を伝えていくことがミッションです。

最近では、市民ミュージカルによる「語り継ぎ」に関わりました。石巻の被災証言を元にした歌や踊り、芝居に、プロの方と一般の方（大人と子供）が参加しましたが、震災後に生まれた子供も多くいました。上演後参加した子供と観客にインタビューすると、観客は普段芸術鑑賞をしなかったり、伝承館に訪れない層の方が見に来ていて、自分の経験を振り返って災害伝承の意義を再確認していたことが分かりました。ミュージカルに参加した子供は、上演直後は「楽しかった」という感想が多く、1ヶ月など時間を置いてから災害に対しての関心が高まっていることが分かりました。

もう一つは、瀬尾さん小森さんの作品「波のした、土のうえ」の語り方の特徴を調べました。大きな特徴として、被災当事者だけでなく、瀬尾さんも含めた非当事者が語っているということが挙げられます。そこで、プロの語り部の語り方と比較しました。「波のした、土のうえ」では、出来事そのものよりもその背景や文脈を描写していること、出来事を俯瞰的に述べるのではなく私（個人）の視点から語っていること、当事者だけでなく、当事者と非当事者双方の声を重ねていることが分かりました。

市民ミュージカルでの「語り継ぎ」
Disaster Storytelling through citizen's musical

みんなのしるし合同会社（2022）『いのちのかたりつぎ』

—被災証言等をもとにした５つの歌、語り、芝居
Songs, dances, and plays based on survivors' narratives

—宮城県石巻市
2022年1月ワークショップ３回、2月公演
Ishinomaki city, January-Febrary 2022

—出演者：プロ5名、参加者 大人5名、子ども12名
（うち10名は震災後に生まれた小学生・幼児）
Participants: Professional, Adult, Children born after disaster

—観客：102名（主に子どもの保護者、被災者）
Viewers: 102(parents mostly experienced disaster)

＜アンケート、インタビュー結果　the results of the questionnaire and interviews＞
観客：普段芸術鑑賞をしない、伝承館を訪れない層が鑑賞し,自身の経験を振り返り、災害伝承の意義を再確認していた
Viewers: Citizens who do not normally appreciate the arts or visit lore museums appreciated
子ども：災害への意識の変化があったのは、公演直後より1か月後
Children: the change in awareness of disaster occurred one month after the performance

『波のした、土のうえ』の語り方の特徴
A constructive analysis of Under the wave, on the ground

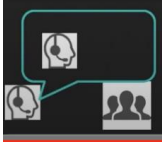
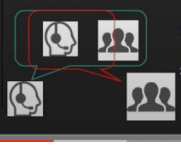
小森はるか＋瀬尾なつみ（2014）『波のした、土のうえ』

—岩手県陸前高田市の住民3名に焦点、3人の語り手
Focusing on 3 survivors live in Rikuzentakata city, Iwate

—被災の当事者だけでなく非当事者も語っている
Not only the survivors but also non-affected are narrating.

＜『波のした、土のうえ』の語り方の特徴＞
①出来事そのもの（被害、避難等）よりも、背景や文脈を詳しく語る
②当事者の視点（知覚や感情など）から語ることで、当事者と非当事者の共通点に目を向けさせる
③語り手と聞き手の役割を固定せず、当事者が聞き手に、非当事者が語り手になる工夫がある

＜分析結果 the results＞

くぎこ屋 professional storyteller	波のした Under the wave
出来事そのものを描写 Describing the event itself	出来事の背景や文脈を描写 Describing the background and context of event
三人称視点 third-person perspective	一人称視点 first-person perspective
 当事者の声 Voice of survivor	 当事者／非当事者双方の声 Polyphony of Survivor and non

【質問やコメント】

瀬尾：遠足プロジェクトと自分がこれまで取り組んできたプロジェクトに似ている部分があると感じました。
　聞き手は語りを聞くとき、自分自身が持っている経験と照らし合わせながら受け止めます。聞き手と語り手、互いに理解できる部分を見つけられたり、どこかで共感したりすると、人間的な繋がりが生まれます。
　語り部の方はよく、「聞いた人がどういう風に受け止めてくれたか分かると楽しい」と話しますが、継承の現場には、お互いを知る面白みがありますね。

武谷：東日本大震災の時に支援物資で送られてきたランドセルがプロジェクトの元になっていますが、例えばインドネシアでは、ジャカルタの公害のことから着想して、東日本大震災につなげて作品を作るということが起きます。それを観たインドネシアの鑑賞者は公害という観点から共感し、これが日本のランドセルだと知る中で、東日本大震災へ思いをめぐらせます。なので、遠足プロジェクトの場合、当事者と非当事者の境界線をひとつにすることはできません。

梶原：瀬尾さんに質問です。語りの場を作っていく時にどういう場にしたら語りやすい場になりますか？

瀬尾：被災直後の陸前高田では、誰もが語らずにはおれない状況で、私が黙っていてもどんどん話してくれました。一方、被災から20年目の神戸の場合、ただ黙っていても震災の話は聞けないんですよね。そこで、何を聞きたいかをちゃんと口に出さなきゃダメだと思いました。
　多くの人が自分の体験は大したことがない、もっと語りに適した人がいると思っています。でも、どんな語りにも価値がある。だから語り手が「私もこれを語ってもいいんだ」と思えるようにする必要があります。基本的には相手を勇気づけること。「あなたの経験は、あなたしか持っていない貴重なものなんだ」と伝えることが大事だと思っています。

嘉藤：私の活動は、遠足プロジェクトを首都圏で紹介することで、昨年は横浜の路上で3日間開催しました。遠足プロジェクトの形態は大人も楽しめるものですが、参加した方達が震災の悲しさを背負っていたかというと、それは出来ていなかったと思います。むしろ、大人自身の幼少期の体験を自分の子供たちと共有できることがプロジェクトの面白さだと感じました。展覧会という形よりも、路上で背負ってもらうということで、モノの価値や作品へのアプローチは広がったと思います。

アルマ：瀬尾さんに質問です。フィリピンでは、災害の後すぐに人々が話しはじめる国民性ですが、日本は少し違う気がします。瀬尾さんはどうやって地元の人の心を開いたのですか？地元の人と信頼関係をどのように築きましたか？

瀬尾：町の人が安心して語れるように、その土地やコミュニティの歴史背景や暮らしの雰囲気などを体感的に知っておくことが大事だと考えています。そのために、被災した町跡を歩いたり、記録や資料をたくさん読んだりして、いろいろな語りを受け止める筋トレをしていた気がします。

アルマ：武谷さんに質問です。遠足プロジェクトのアートワークはアーティストが考えたものですか？また、これはコラボレーションですか、それとも被災者自身が作ったモノなのか？

武谷：180点あるうち、日本のアーティストたちは被災地そのものや、その地域の人々との関わり合いを元に作品を作りました。このプロジェクトの場合は、基本的にアーティストの方が作っていて、地域の方が作った作品はありません。

山名：発表者3名がそれぞれ使っていた「引率者」、「旅人」、「メディエーター」が同じ次元にある気がしていて、間に立つ人には何かしらの作法が必要なのではないかと思いました。いくつか問いを置いていきます。

一つ目。広い意味でのトランスレーターになる条件とはなんですか？

二つ目。アートとカタストロフィーというところで、いくつか目的が折り重なっていると思いました。つながる、伝える、創作する、育てる・変わっていくことなどが有機的に重なればいいと思いますが、それらの間にジレンマを感じることはありますか？

最後に、私も含めてここに集まっている方は表現することにポジティブな方が多いと思います。ここにいない方には沈黙をしたり、表現を控えたり、表現の濃縮であるミュージアムに近づきたくない方もいるかもしれません。ミュージアムを立ち上げる際に、表現に前向きではない方の気持ちをどう引き受けるのかということを私自身課題なのではないかと感じました。

編集／櫻井莉菜、瀬尾夏美、梶原千恵